

アカシア探険隊

MI・2013 (冬)

～佐賀大学医学部
分子生命科学研究室潜入の巻～



67回 出原 賢治 氏

～佐賀大学医学部
教授・医学博士～

=アカシア会館内 司令室にて=

乙：先輩、またもコンビ復活ですが、
今回はどがいな分野ですか？

甲：ふふ、医学・生理学分野よ。

乙：え～！苦手な分野じゃ。勘弁してつかあさい。

甲：ほ～、エエんか？前に子供がアトピーじゃ言うたらんかったか？

乙：は？ どういう事ですか？

甲：つまりの、最近アカシアメンバーの一人がアトピー性皮膚炎に関して画期的な研究成果を上げたんよ。これに関するセミナーがあるけえ、そこへ行って取材して、「みんなに分かりやすくに紹介する記事を書け」いうんが今回の指令よ。お前の子供の為にもなるじゃろうが。

乙：ウチんちの口は、もうほとんど
治っとるんじゃけど、…。

甲：ほ～。自分のトコさえエかったら、それでエエんか。お前はそういう奴か？セミナー開催場所は福岡でえ。

乙：あ！行きます、行きます。(帰りに
八天堂のクリームパンが買える！)
セミナーで解からん所があったら
フォローお願いしますね。

甲：セミナーは一人で行け。ワシは九州アカシア会のメンバーと会議があるけえ。

乙：またそれかいや。

と言うことで、今回は67回卒の出原賢治(いずはらけんじ)さんの登場です。出原さんは九州大学医学部のご卒業。卒業後は米国留学などを含め、様々な研究所で多くの成果を挙げられ、今回アトピー性皮膚炎に関する画期的な発見をされました。

セミナーだけではよ～解からなかったの、今回は特別に、直接お話を伺う機会を設けて頂きました。

乙：本日は大変にお忙しいところ、お時間をいただき有難うございます。

出：いえいえ。アカシアメンバーに会えて嬉しいです。こうしてお話し出来るのを楽しみにしていましたよ。

乙：ありがとうございます。今回の発見についてなんですが、アトピー性皮膚炎の「発症メカニズムの発見」ではなく、「慢性化メカニズム」の発見という事ですね？

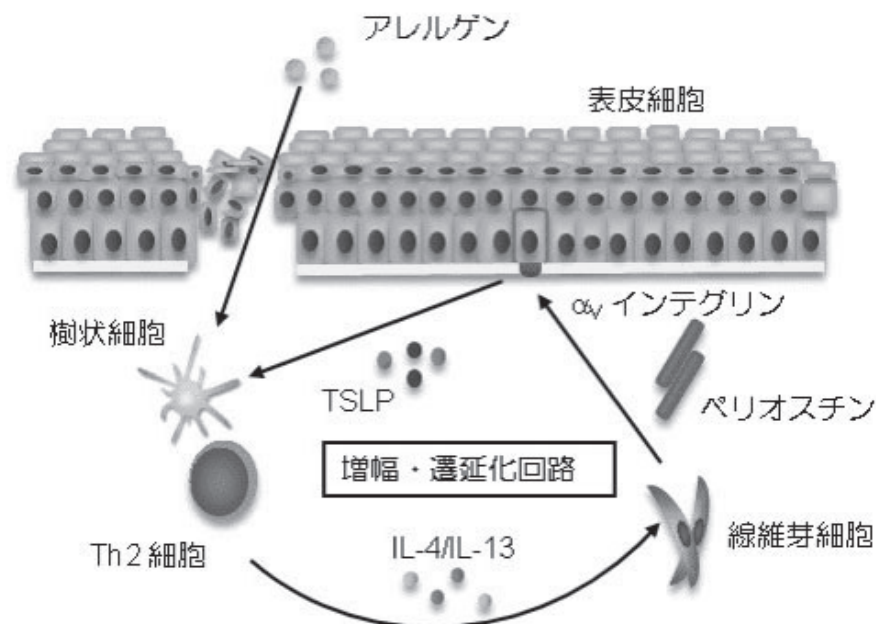
出：その通りです。「アトピー性皮膚炎」は皮膚の遺伝的な障害と、アレルギーが体内に侵入して引き起こすアレルギー性皮膚炎とが組み合わさって生じると考えられています。しかし、一度発症すると、外的要因を遮断しても症状が慢性化してしまう事が多くあり、生涯続く場合もあります。その「慢性化するメカニズム」を今回発見できたのです。

乙：つまり、一度発症すると一次的な原因を取り除いても「悪循環」が始まる事が多く、その負の循環についてのメカニズムを発見されたと言う事ですか？

出：そうです。外的なアレルゲンの刺激に関係なく体内で炎症が続く仕組みがある事を今回発見できたのです。

乙：ということは、世界中の患者にとって大きな福音ですね。

出：いえ、現段階ではそうとは言えません。「慢性化のメカニズム」が解ただけでは患者さんの救いにはなりません。今回の発見で「慢性化という悪循環」を断ち切る具体的アイデアが得られたわけですが、それを実現する新薬が開発されて初めて患者さんの笑顔を見られる事になります。



P r o f i l e

昭和33年10月15日広島市安佐南区長束生まれ、46年長束小学校卒業、49年広島大学附属中学校卒業、52年広島大学附属高等学校卒業、59年九州大学医学部卒業、九州大学第一内科を経て平成3年より米国DNAX分子生物学研究所に留学。国立遺伝学研究所、九州大学を経て平成12年より佐賀大学医学部分子生命科学講座教授。順天堂大学客員教授、京都大学、九州大学、熊本大学、筑波大学非常勤講師を歴任。

す。これからが重要なのです。

乙：とはいえ、今回の発見だけでも希望を持たれた方は多いでしょうね。

出: はい。今回の発見を発表後、世界中の方々からお手紙・メールを頂きました。皆さん本当に苦しんでおられます。重度の方、特に顔面など露出の多い部分に発症されている方のお悩みは深刻です。大きなコンプレックスを感じて「引きこもり」になり自殺を考えていたが大きな光明を感じて生きる力を得ることが出来



た、とのメッセージを頂いたときには、心からの喜びを感じると同時に今後への責任を痛感しました。一日も早く新薬を開発して患者さんに届ける責任を強く感じています。

乙：なるほど。今後の研究活動にますます期待したいと思いますが、素朴な疑問として、そもそも何故「アトピー」がここまで深刻になってきたのでしょうか？

出：そうですね。やはり「時代」ではないでしょうか？生活環境がキレイになり過ぎたのかもしれないし、幼少の頃に免疫的な訓練を行う環境が失われているのかも知れません。ある意味「先進国病」・「文明病」かもしれませんね。

乙：話は変わりますが、附属時代はどのような学生生活でしたか？

出：まあ、普通の生徒だったと思いますよ。ごく平均的な。

乙：医師は早くから目指されていたのですか？

出：う～ん、どうですかね。高校生らしく進路にはそれなりに悩んだ記憶があります。その中で大きな影響を受けたのが「赤頭巾ちゃん気をつけ

て」という庄司薫の小説です。「みんなを幸せにするにはどうしたらいいのか」という、当時でも青臭くて気恥ずかしいことを臆面もなく考える主人公が私にはとても格好良く感じられました。将来「どうやって人の役に立つか、社会に貢献するか」を考えた時、当時の私には医師という仕事が最も分かりやすかったんでしょうね。

乙：その他、附属時代の印象的な事はございませんか？

出：そうですね。たくさんありすぎて、、、。今から思えば大学のような高校だったと思います。やりたいことがあれば何でもやらせてくれるけど、その代わり責任は生徒自身が持たなければならないような雰囲気充溢していました。「生徒自身が考え、実践する事」を非常に尊重してくれる学校だったと思います。「何でもやってみよう。やらせてみよう。」という非常に前向きな学校だったと思います。学校行事でもクラブ活動でも。授業でさえ生徒が望めば、生徒自身がテーマを決めて討議させてくれていました。例えば世界史の授業などがそうでしたね。

体育祭や文化祭なども同じで、高



Iの時は上級生の見習いみたいな感じでしたが、高II・高IIIと進むにつれて前年を上回る創造力を発揮しようと頑張りました。先生方や卒業生の方々から「なんやあ、今年はずまらんのう。」なんて言われたくなかったですからね。

乙：その「創造力発揮」が今でも活かされているんですね。

出：私の場合がどうかは別にして、一般的にはそれが大きな力になると思います。しかしそれには絶対に「行動力」・「実践力」が伴っていないとダメですね。どんな分野でも「想像力」・「創造力」は必要ですが、結局はそれらを元にした「実行力」だと思うんです。いくら頭で考えてもそれを目に見える形にするパワーが無いと。

乙：アカシアのメンバーに対するメッセージをお願いしますか。

出：高校卒業後、ずっと広島を離れています。アカシアのメンバーは全国におられ、当地(九州)にもたくさんおられます。その方々には大変お世話になっています。広島を離れていてもアカシアの大きな「絆」を感じています。本当にありがたい事です。今後ともお世話になるとは思いますが宜しくお願いいたします。

乙：現役生徒諸君へのメッセージもお願いします。

出：私が卒業したのは35年以上も前の事です。当時とは時代背景も環境も全く違いますが、アカシア(附属)に流れる本質的なスピリットは不変だと思います。附属生としての良い意味でのプライド・矜持を持ち、将来は日本・世界の為に貢献できる人材となるよう日々の学校生活を悔いなく、そして楽しく送ってください。

乙：本日はお忙しいところ、有難うございました。

◆ ◆ ◆ ◆ ◆

甲：甲斐 稔(63回)

乙：谷口 公啓(73回)

J1初優勝!!

おめでとう、サンフレッチェ広島。

加藤義明(44回)、大橋謙三(44回)、野村尊敬(50回)、小城得達(51回)、榎並 毅(52回)、田中保昭(54回)、吉池文夫(56回)、大辻 明(58回)、白井孝司(59回)、長沼 毅(61回)、古田篤良(61回)、山下勝也(69回)、先本賢司(71回)、谷川秀樹(71回)